

# 石岡市中心部における都市空間の特性

高橋伸夫・小野寺淳・松村公明・船杉刀修・芳賀博文

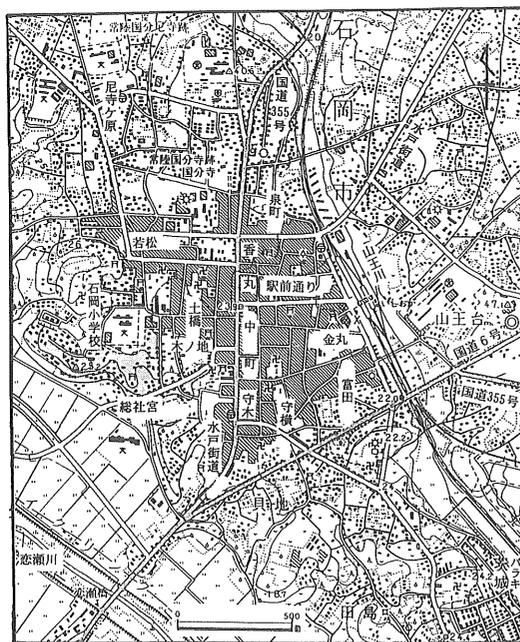
## I はじめに

本研究の課題は、茨城県石岡市中心商店街の歴史の変遷を踏まえ、主に商業活動に携わる地域住民によって構成される生活組織を見出し、彼らの生活組織への関わり方を通して、石岡市中心商店街における都市空間の特性を考察することである。

わが国の都市地理学において、都心研究は主要な課題の1つとして、これまで主に経済事象の側面から、都心部の機能および形態を解明しようとする研究が蓄積されてきた。そこでは、都心部を中枢的な都市機能が集積する空間として捉え、同時に中高層建築物が被覆する空間として認識してきたため、経済的な機能のみが重視される結果となった。このため、一方では生活空間としての都心部を見過ごすこととなった。

このような研究上の空隙を埋めるために、都心部を生活空間として捉え、そこに居住し生活する住民が関わる多様な生活組織、すなわち地域コミュニティに着目することが必要とされている<sup>1)</sup>。これまでの地域中心都市における事例研究では、中心商店街の店舗は小規模な家族経営が主体で、市街地周辺部に街路沿線型の商業集積が進展する一方、既存の中心商店街への店舗の新規立地が少なく、基本的に職住分離が進行していないことを明らかにした<sup>2)</sup>。このような職住一致の割合の高さは、最小限の地縁的な生活組織を残存させ、生活住民の意識には村落共同体的な意識が色濃く残存しているように思われる。このような問

題意識をさらに深化させるためには、都市の歴史的な変容に着目する必要がある<sup>3)</sup>。本研究では常陸国国府の所在地として知られ、人口52,655(1993年11月30日現在)の地域中心都市である石岡市を研究対象とすることにした(第1図)。



第1図 研究対象地域  
(25,000分の1地形図「石岡」(1986年修正)を使用)

## II 都市石岡の起源とその変遷

### II-1 国府から城下町そして陣屋町へ

石岡市は常陸国府の所在地として知られているが、現在の石岡中心商店街を含む市街地に比定さ

れる石岡国府は、近年の研究によって、中世前期の成立であることが論証された<sup>4)</sup>。これ以前の国府、すなわち鎌倉時代の税所文書に「古国府」と記載された場所は、現在の茨城1丁目周辺に比定され、この茨城国府は10世紀末から鎌倉初期にかけて機能したという。鎌倉初期に成立した石岡国府には、現在の若松2丁目の府中中学校敷地に比定される国庁のほか、筆頭在庁官人となった常陸大掾馬場氏、平安期の筆頭在庁官人であった税所氏、香丸の地に名田畠を有していた香丸大中原氏などの在庁官人屋敷、国分寺、総社宮が建ち並び、現在の木之地、元真地などには商工業者の居住地区が形成されていたと考えられている。

南北朝期になると、常陸太田の佐竹氏が常陸国の守護となったため、守護所としての常陸太田が発展した。このため、府中石岡は常陸国第2の都市となったが、南北朝期の石岡国府では六斎市が開催されており<sup>5)</sup>、都市として繁栄していた。その後、1416年(応永23)の上杉禅秀の乱を契機として、これに組した常陸大掾馬場氏の勢力は徐々に衰えたといわれる。しかし、15世紀後半ないし16世紀初頭には、常陸大掾馬場氏によって府中石岡城の城下町が形成されたと考えられている<sup>6)</sup>。この時期の城下町は、現在の香丸、金丸、室ヶ井(室貝)を中心とした範囲であり、城下町は戦国期には総構えで区画されたと想定されている。

1590年(天正18)常陸大掾馬場氏が佐竹氏によって滅ぼされると、戦国期の城下町石岡は戦火で焼き尽くされた。やがて、1602年(慶長7)に佐竹氏が出羽国秋田に国替えになると、替わって出羽国仙北郡から六郷氏が1万石をもって石岡に入部した。佐竹氏、六郷氏、その後に入部した皆川氏は、近世城下町石岡の建設を施行したと考えられる。しかし、1645年(正保2)に皆川氏が転封され、幕府領、松平伊豆守、松平伊勢守、幕府領と領主が交代するなかで、石岡城そのものは解体が進んだ<sup>7)</sup>。1700年(元禄13)水戸徳川家から松平頼隆が府中藩2万石の藩主に迎えられ、松平氏が江戸定府であったことから、石岡城内の現在の石岡小学校敷地に陣屋が設置された。このため、

石岡は城下町から武家地を有さない陣屋町となった。

このように、現在の石岡中心市街地の原型が17世紀に形成されたにもかかわらず、石岡は行政上では少なくとも1625年(寛永2)の検地から「平村」と村扱いであった。当時の平村の石高は5,040石であり、平村は常陸国最大の村であった。この都市と村の二重構造ゆえに、府中藩は平村を香丸組(香丸のほか、仲之内、国分、泉、青木、若松等を含む)、中町組、守木組、富田組に分け、各組に名主、組頭を置いて年貢を徴収するとともに、その上に2名の町年寄を置いて都市行政を担当させた。都市と村の二重構造は、都市内部においてムラ的な社会・生活組織を維持していくことになる。

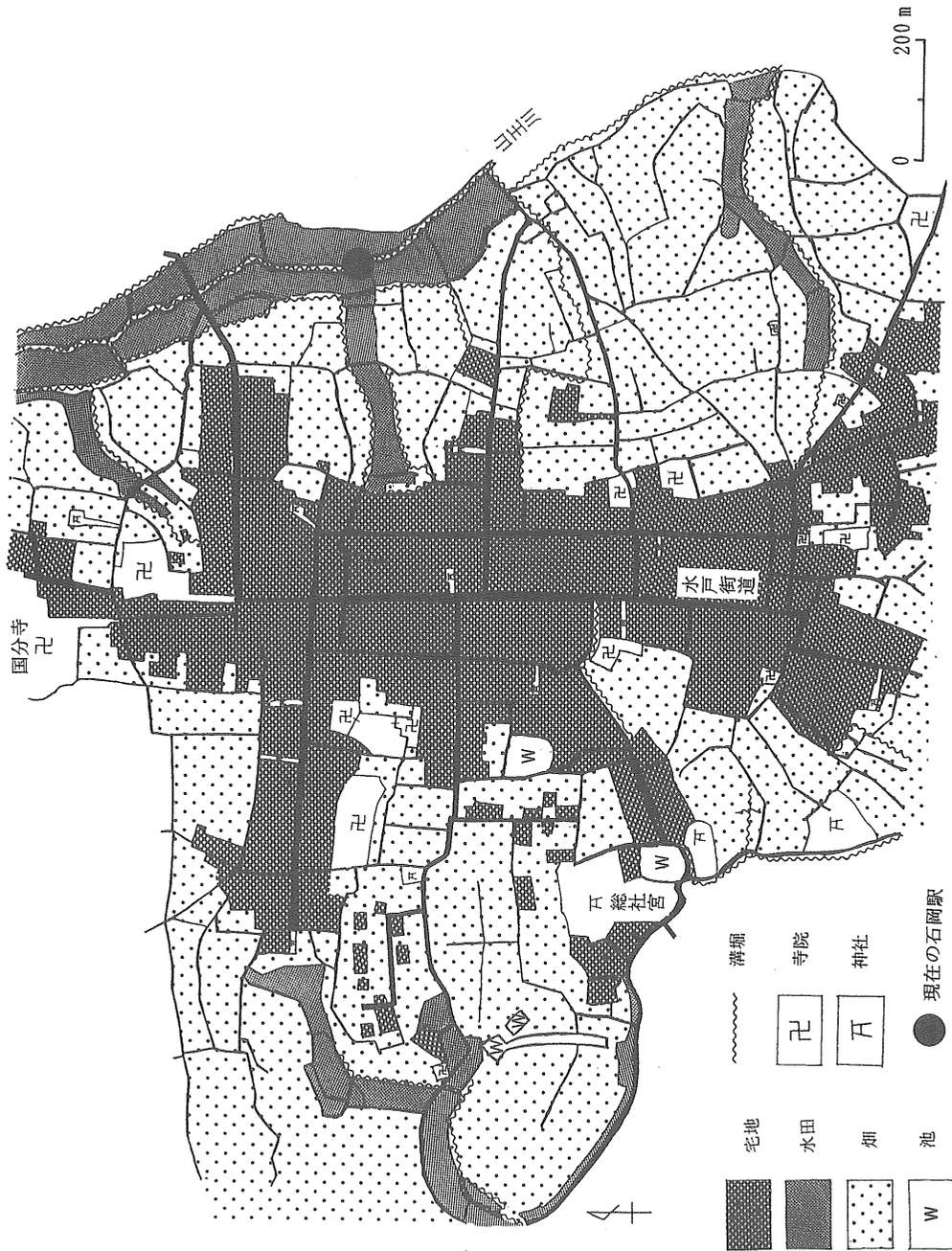
## II-2 近世石岡陣屋町の景観

近世石岡陣屋町の景観を考える上で、ここでは天保期(1830-1843年)の「府中町絵図」<sup>8)</sup>を取り上げてみよう(第2図)。この絵図は陣屋、本陣を中心に道、寺社などを描き、町名と名主名を示したスケッチマップである。

町の中央を南北に縦断する水戸街道は、土浦方面から北上すると、幸町(土器屋町を宝永年間に改称)の木戸を抜け、突き当たりの地藏院で鍵型となり、南北に守木町、中町、香丸の中心商店街を通り、突き当たりに位置する千手院を右折、泉町(新宿を改称)の木戸を抜け、山王川の沖積地で橋を渡り、岩間方面へ北上している。すなわち、町の中心部を南北に縦断する水戸街道は、真言宗千手院を基準にして設定されたと考えられる。千手院は818年(弘仁9)開基といわれ、1252年(建長4)から廃寺、1573年(天正元)に再興された。1585年(天正13)に国分寺が焼失し、後に千手院によって再興されたことから、1919年(大正8)に国分寺と千手院が合併するまで、千手院は城下町石岡の都市プランを構成する上で重要な位置を占めていたといえよう。

府中藩松平家の陣屋は台地西端の旧石岡城三の丸に位置し、ここから水戸街道へは東に土橋町、





第3図 石岡市中心部の土地利用——1888年（明治21）——  
 （石岡市立図書館保管地籍図より作成）

木之地町の通りがあった。この通りは城下町であれば大手道に相当し、これに直角に交差する水戸街道は横町、すなわち近世石岡は横町型の形態であったといえる。水戸街道に沿った中町には、水戸藩本陣とされた町年寄の矢口平右衛門家、隣接

して天王社・福壽院があり、絵図にその図像を誇張表現して描いていることから、中町が近世石岡の中心部であったことが確認できる。中町の北の香丸町は上下に分かれ、絵図には描かれていないが、香丸下町には矢口家と並ぶ町年寄山口新兵

衛家があった。また、香丸町には近世前期に下総国銚子より来住したという旧家がみられ、石岡の城下町建設と霞ヶ浦・常陸川水運による商業的な関連をうかがうことができる。

絵図には、12の寺院が描かれている。これらの寺院には、廃寺となったものもあるが、文禄・慶長期に尼寺ヶ原などから移築されたといわれる寺院が多い。清涼寺は真言宗から曹洞宗へ改宗し、遅くとも1592年（文禄元）には尼寺ヶ原より現在の守木町へ移築、松平氏の菩提寺とされる照光寺も鹿ノ子より1609年（慶長15）に香丸氏の屋敷跡に移築、本浄寺も尼寺ヶ原より1611年（慶長17）に六郷氏によって現在地に再建された<sup>9)</sup>。これらの例からも、近世城下町の建設に伴い、寺院が集められたことが明らかである。

神社は、総社宮、青屋神社、金比羅宮のほか、国分寺と関係の深い日天宮、星の宮（貝地の月天宮を含めて三光ノ宮という）、そして稲荷神社が10か所に描かれている。稲荷神社は府中七稲荷といわれ、仲之内町の福德稲荷、金丸町の鈴宮稲荷をはじめ、青木町、守木町、守横町の稲荷社は絵図に示された位置に現存する。また、中町の稲荷は金刀比羅宮に合祀され、橋本旅館の南端にあった香丸の稲荷は総社宮に合祀された。このように、稲荷社は石岡の各町ごとに存在し、各町住民の結衆としての性格を持っていたと考えられる。

### Ⅲ 近現代における都市石岡の産業と景観

#### Ⅲ-1 石岡市街地の産業と景観変化

石岡は火災の多い町であったといわれ、近代に入っても、1870年（明治3）には若松町から出火し、中心商店街500戸を焼失、さらに1878年には中町から出火し、守木・富田町320戸を焼失した。しかし、近代における石岡市街地の拡大がみられるのは、1895年（明治28）11月の鉄道開通以後であり、ここではまずそれ以前の土地利用を1888年（明治21）に作成された地籍図をもとに復原し<sup>10)</sup>、あわせて明治中期から大正期の市街地の産業と景観変化の関わりを考察する。

第3図に示した明治中期の土地利用をみると、

現在の石岡駅前は山王川沿岸の水田地帯に位置し、1929年（昭和4）の大火後に敷設された駅前通り（八間道路、御幸通りとも呼ばれる）は谷津田であった。この谷津田の北側は現在の大小路・御厩下、南側は金丸の一部であり、当時は畑地であった。また畑地は、水戸街道の東側の室ヶ井や守横東・高房周辺<sup>11)</sup>から貝地、一方国分寺より北側の台地部に広がっていた。明治中期の土地所有は不明であるが、市街地東側の山王川沿岸と西側の恋瀬川沿岸の水田ならびに上記の畑地の多くは、石岡の町人が所有していたと推測される。聞き取りによれば、市街地内部でも明治以後に他地域の地主所有に帰したのもあったが、中町・香丸などの石岡の有力商人は同時に近世以来の地主でもある。これらの有力商人は、醸造業を中心にして、銀行、鹿島参宮鉄道などの経営に資本を投下することになった。

#### 1) 醸造業の立地とその変化

近代石岡の中心的産業は醸造業であり、酒造は元禄期、醤油は宝暦・天明期以前から始まったとされる。明和期の酒造株をもつ商人の居住地をみると、中町に7軒、香丸に3軒、木之地に1軒であり<sup>12)</sup>、近世の酒造業は中心商店街区域の内部で行われていた。しかし、幕末から明治前期になると、醸造高の増加や新規に醸造業を始めるものが現れ、醸造業は中心商店街区域よりもむしろその周辺に立地するようになった。たとえば、1829年（文政12）に近江国日野から来住した村田宗右衛門は、守木町の4,300坪の土地に20棟の酒・醤油醸造蔵を建て、1897年（明治30）頃に廃業するまで石岡を代表する豪商となった。醤油は土浦で衰退していったのに対して、むしろ醸造高を伸ばした。村田家や大和田家のように清酒に加えて醤油醸造を始める業者もあり、また村田家と同じく近江商人の金子源兵衛は泉町で醤油醸造を行い、明治中期の醸造高は県下随一の販売額であった。

このように、石岡の醸造業は明治期に最盛期を迎え、この間に廃業した業者もあったが、戦前昭和期においても第1表のように酒造11社、醤油11社を数えた（写真1）。また第1表から、中町・

香丸町よりも、石岡駅に近い金丸町、守木町、泉町などに醸造業者が移転ないし新規操業した例が多かったことが確認できる。

第2次世界大戦後は、山本、冷水、大和田、柴野らの醸造業者が石岡銘醸として共同ビン詰めを行い、1972年には石岡酒造として合併し、石岡市東大橋に共同工場を建設した。このため、中心商店街区域の醸造工場跡地には、現在ではショッピングセンターやホテルなどが建設されている。

## 2) 桐材加工業から家具小売業へ

大正・戦前昭和期の石岡では、桐材加工業が盛んとなった。土浦<sup>13)</sup>と同様に地場あるいは会津などの東北地方の桐が集荷され、タンスや下駄に加工して東京および九州地方までも出荷した。特に、1929年(昭和4)以降、石岡駅に近い大小路などに桐材加工業者が集住した。大手の業者は、最盛期には150人ほどの職人を雇用したといわれ、駅前には木工用機械の製造工場もあった。しかし、戦後は石岡タンス協同組合を組織したものの、家具小売業への転換を余儀なくされた。また、職人の一部は石岡に残って下駄を作り、履き物店の経営へと転職したため、現在でも金丸町などには履



写真1 1938年(昭和13)における石岡の醸造業者

き物店が多い。

1991年の工業統計準備名簿によれば、石岡市には17社の家具店があるが、石岡中心商店街に店舗を持つ今泉家具、山新家具、七谷家具などは、桐材加工業から派生している。これらの家具店の中には県内主要都市に支店を出したり、郊外型のDIY(Do it yourself)店の経営へと事業を拡張しているものもある。

第1表 戦前昭和期における石岡の醸造業者

清酒	屋号	商標	町名	醤油	屋号	商標	町名
大和田健三郎	久保倉	大徳	木之地	大和田健三郎	久保倉	大徳	木之地
柴野善兵衛	銚善	長寿	仲之内	武石伊兵衛	-	笹印	仲之内
冷水彦太郎	角蔵	都白菊	香丸	濱平右衛門	小川屋	山吉	香丸
石岡酒造	-	平和菊	元真地	多田清兵衛	岡清	カネ吉	香丸
山本吉蔵	白鹿	白鹿	金丸	一色宗十郎	富士色	富士色	守木
川上廉太郎	大坂屋	白扇	金丸	矢口徳太郎	西宮	亀甲西	守木
山内又兵衛	橋本	太平海	富田	久松直助	久松	丸正	幸
島田勘太郎	境屋	さか利升	青木	野口藤三郎	浜屋	丸重	青木
渡辺子之吉	川崎屋	泉川	泉	金子源兵衛	金源	カネ十	国分
渡辺梅之助	川崎屋	梅泉	泉	家田太兵衛	廣屋	亀甲廣	国分
戸田和助	和泉屋	我が君	泉	石塚角助	石塚	富士石	泉

(昭和6年「国道拡築記念石岡町市街全図」、昭和10年「市内著名営業者一覧」より作成)

注) 明治中期から戦前昭和期にかけて、村田宗右衛門、小網郡次、真家宗兵衛、水谷西之助、折本宗七、野口勘兵衛が廃業している。なお、表中の醤油醸造の武石伊兵衛も戦前昭和期には廃業した。

### 3) 製糸業から縫製業へ

明治20年代には養蚕業の進展を背景として、石岡製糸所、熊岡製糸所などの製糸工場が相次いで操業した。1895年（明治28）の「第14回茨城県勸業年報」によれば、石岡町には7つの製糸工場が操業していた。1917年（大正6）には長野県の小口組の石岡製糸所（神栄製糸の前身）が青木町で操業を開始し、また2年後には石岡駅近くの大小路に石岡繭糸市場が新設され、明治・大正期の石岡町は古河町に並ぶ県内有数の製糸の町でもあった<sup>14)</sup>。

戦前昭和期には、香丸町の商人を中心に小川町の百里ヶ原海軍航空隊との取引が盛んとなった。この軍需景気は一時的なものではあったが、石岡の中心商店街にとっては大きな意義をもっていた。その一つとして、縫製業、そして既成服の製造をあげることができる。戦前から軍服需要のために常陽既成服という軍需工場が操業、戦後の1957年には石岡縫製が操業し、これらの縫製工場で技術を習得した職人の一部は、既成服製造業の経営へと転換した。この中には、現在では中心商店街で婦人服の小売店を経営する者もいる。

#### Ⅲ-2 石岡中心商店街の景観変化

近代石岡中心商店街の景観上の変革期は、1929年（昭和4）であった。同年3月、中町から出火した火災は香丸町ならびにその以北を除く、589戸を全焼させた（写真2）。この年の秋、折しも天皇の行幸が行われることもあって、写真3のような御幸通りと呼ばれる8間幅の駅前通りが新たに敷設され、中町商店街では道路の拡幅と歩道の整備が行われた。これにより、写真5に見られるように、中町、守木町ならびに駅前通りの街路には、モダンなガス灯がとまり、ポプラの街路樹が植えられた。中町の商店街では、土蔵造りの店蔵は焼け残ったものの、焼失した建物の多くは2階建ての洋風建築や木造モルタル建築へと建て替えられた。店蔵と洋風建築の入り交じる商店街の店舗景観は、地方中心都市の風格を示すものであった。しかし、高度経済成長期になると2階の部分



写真2 1929年（昭和4）石岡大火後の中町  
香丸町以北を除く589戸が全焼した。右側は警察署（現在、関東銀行）、左側の土蔵は福島屋（現在、石岡ラジオ電器店）。

に店名などを記した面覆いがかぶせられ、アーケード化されることによって、写真6にみられるような現在の店舗景観へと変貌した。地方小都市に一般的にみられる面覆いは、石岡中心商店街においても、景観上その個性を失わせる結果を招いている。

一方、1929年の大火で類焼を免れた香丸町は、1983～88年に片側の歩道幅を3.5m保持するために、店舗をセットバックすることになった。このため、近年まで土蔵造りの店蔵がみられたが、拡幅に伴う店舗の新築が相次いで行われた（写真8・9）。しかし、香丸町の有力商店は、その蓄積された資本をもとに郊外に店舗を出店したり、卸売業に転換する商店が多く、店舗を新築してもむしろ住宅としての利用が顕著になっている。このため、小売業が卓越する中町商店街と香丸町商店街では、景観上顕著な差異がみられるようになった。

ところで、明治中期の地籍図をみると、水戸街道に沿った中心商店街では短冊型の地割が卓越する。香丸下町と中町の間口は7間ないし5間で平均6間と広く、これに対して中心部を挟む泉町・香丸上町と守木・幸・富田町の間口はほぼ4間とやや狭い。間口の広狭は、近世以来の中心が中町



写真3 石岡駅から見た駅前通り(1956年頃)

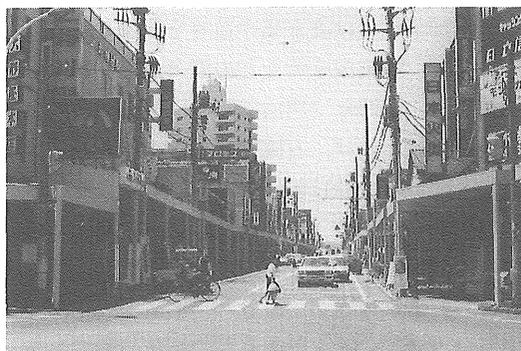


写真4 現在の駅前通り(1993年)

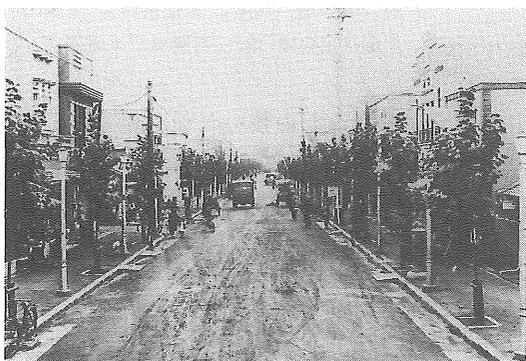


写真5 1935年(昭和10)頃の中町商店街  
1929年(昭和4)の大火から復興, 歩道  
にはポプラの街路樹がみられる。



写真6 現在の中町商店街(1993年)



写真7 中町から見た香丸商店街(1956年頃)



写真8 現在の香丸商店街(1993年)  
1983年から1988年の近代化事業によっ  
て, 店舗がセットバックされ, 歩道が設  
置された。

と香丸下町であったことを示している。香丸・中町・守木町は方格に区画され、店舗から裏通りまでの奥行は約40～45間ほどもある。水戸街道より西側の地割は裏通りまで突き抜けているが、東側はほぼ中央で分割されている。すなわち、水戸街道の東側に平行する通りにもすでに近世から店舗や職人の住居があったと推定され、細長い短冊型地割の中で、水戸街道に面する店舗とその東側に平行する通りに面する店舗が背中合わせとなっていた。

このような明治中期の地割は、第4図に示したように現在でもほぼ存続している。たとえば、写真10に示した近世以来の店蔵を残す丁字屋のように、短冊型地割の中は店舗、住居、中庭、土蔵といった順に配列されている。しかし、近年のモータリゼーションによる駐車場不足のため、移転や廃業した店舗の跡地は、駐車場への転用が顕著である。中町では大型店舗コーキショッピングプラザの駐車场面積が広く、また短冊型地割の中央で分割されている守木町では、その中央部が駐車場やアパートなどに転用されている。

#### Ⅳ 石岡中心商店街の商業活動

##### Ⅳ-1 石岡市商業の推移と現況

高度経済成長期以前における石岡市は、水戸・土浦両市の商圈と競合するため谷間の町といわれ、両市の商店経営が大きく変化していくなかで、保守的で地味な老舗を中心とした商業活動の町といわれてきた<sup>15)</sup>。すなわち、石岡市は伝統的な商業都市であるにもかかわらず、県内における2大商業中心都市との関係位置が、石岡商圈の空間的拡大を抑制する要因の1つであったことが推測される。

近年における石岡市の商業環境もまた、石岡商圈が水戸・土浦商圈との競合関係にあるという点において変化はない。第5図に示すように、まず、商圈中心都市である石岡市自体が土浦商圈にも包含され、土浦市に近接した千代田町および玉里村もまた石岡商圈と土浦商圈の双方に含まれている。一方、水戸市に近接した美野里町および岩間



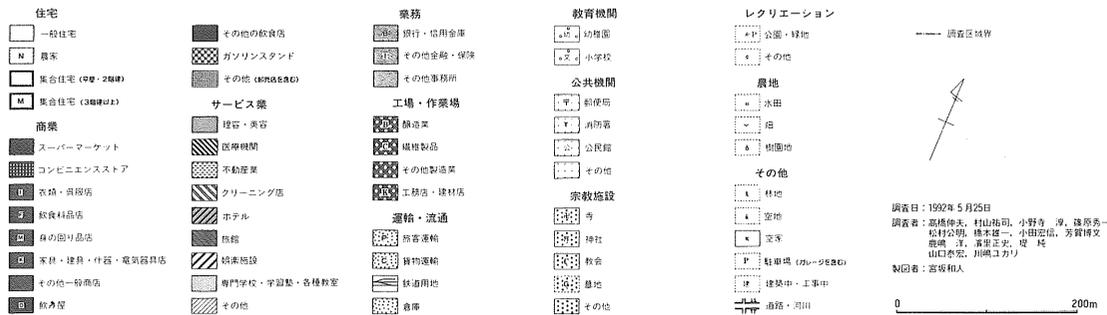
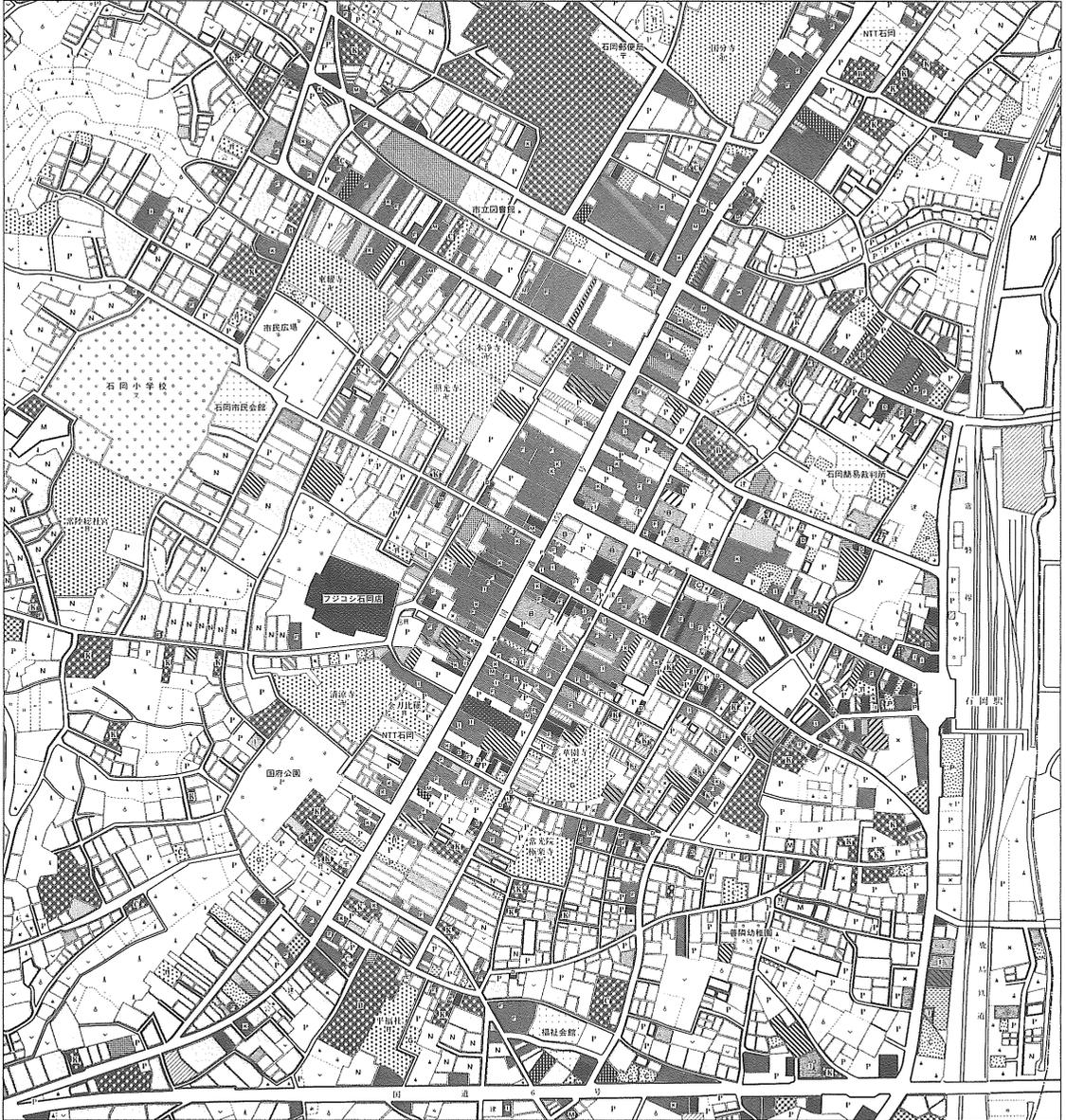
写真9 香丸町の店蔵（1993年）



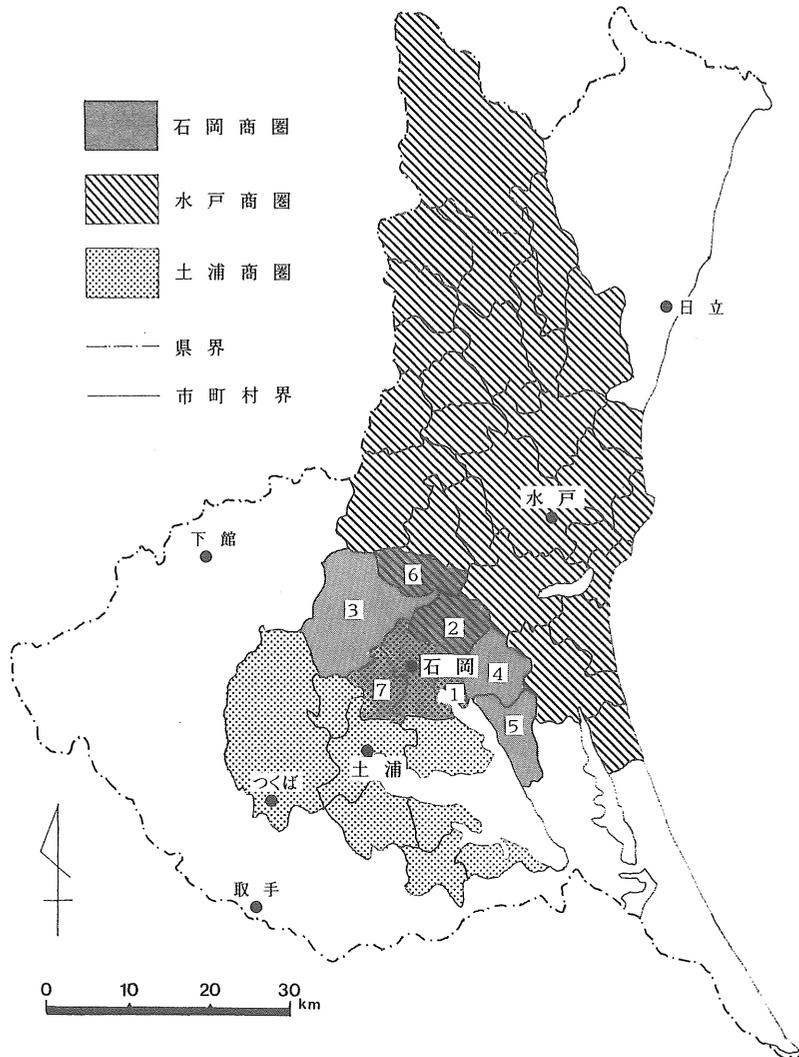
写真10 コーキ屋上から見た丁字屋（1993年）  
近世以来の地割を踏襲した家屋配置が現存している。

町は、石岡商圈と水戸商圈の双方に含まれている<sup>16)</sup>。このように、石岡商圈は、水戸・土浦商圈の影響を強く受けており、東西に細長い商圈域を形成していることも両商圈の影響と考えられる。

しかしながら、石岡商圈それ自体には発展がみられる。1991年の石岡商圈は、石岡市を商圈中心都市として、その圏域は周辺7町村に及んでいる。それらは、玉里村、美野里町、八郷町、小川町、玉造町、岩間町、千代田町である（第5図）。石岡市を含む商圈内8市町村の人口は、184,484であり、そのうち商圈内吸収人口（以下、商圈人口と呼ぶ）は、83,400である。この商圈人口は、県内第7位に位置し、水戸、土浦、日立、つくば、



第4図 石岡市中心部の土地利用 (1992年)  
 (現地調査により作成。宮坂和人製図)



石岡商圏の町村名（石岡市の吸収率の高い順に配列）

- |        |         |         |        |
|--------|---------|---------|--------|
| 1. 玉里村 | 2. 美野里町 | 3. 八郷町  | 4. 小川町 |
| 5. 玉造町 | 6. 岩間町  | 7. 千代田町 |        |

第5図 石岡・水戸・土浦商圏の圏域（1991年）

（常陽産業開発センター（1992）：『茨城の商圏』より作成）

勝田、取手の各商圏に次いでいる。また、県全体にわたって、地元での購買率の上昇などによって、商圏中心都市の勢力の相対的な低下が認められる状況において、1988年から1991年の間に、石岡市の商圏市町村人口に占める商圏人口の割合は高まっている<sup>17)</sup>。

石岡市の商業において、伝統的な桐材加工業を

基盤とした家具小売業の発展については、前章で述べた。このことは、石岡市の商圏を品目別にみた場合、「家具・インテリア」の商圏人口が最も多いことに示されている<sup>18)</sup>。「家具・インテリア」の商圏人口は、106,459である。また、平成3年商業統計によれば、石岡市の小分類別にみた売場面積において最大を示す業種は、家具・建具・畳

小売業であった。茨城県の都市において、この業種が売場面積で最大を占めるのは、石岡市と牛久市のみとなっている。

#### Ⅳ-2 石岡市における商店会と大規模小売店舗

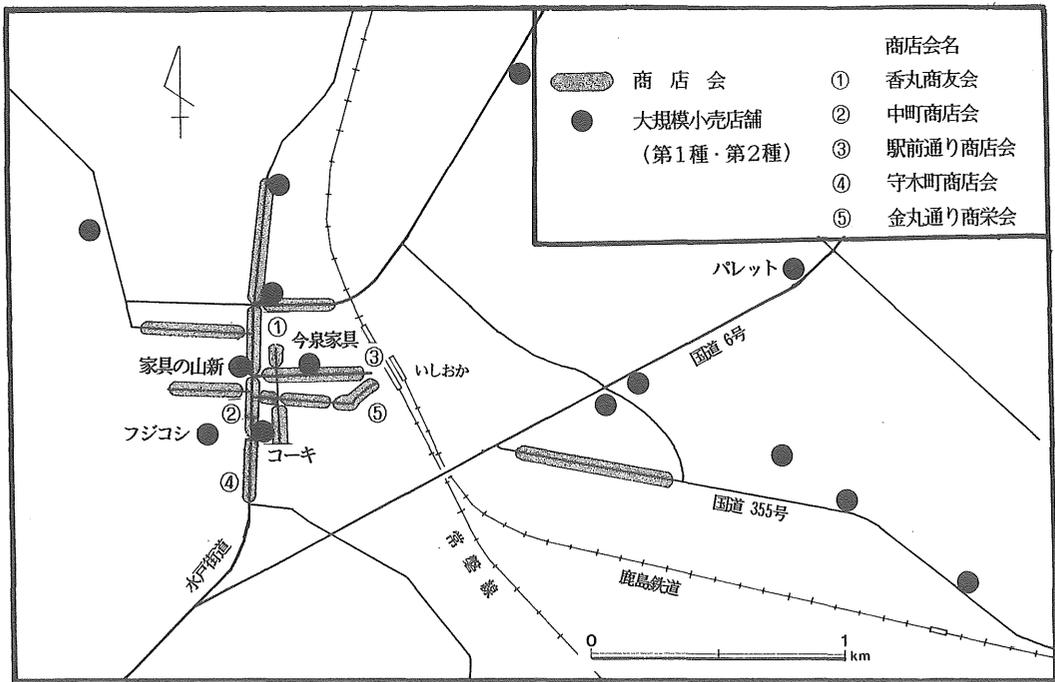
##### 1) 商店会

石岡市商店会名簿によれば、石岡市域には、地域あるいは街路を単位として、15の商店会が組織されている。1992年における商店会加入店舗数は589である。地域的にみると、15の商店会のうち、13の商店会が石岡中心市街地で組織されている(第6図)。

石岡中心市街地で最も早期に設立された商店会は、香丸商友会、中町商店会、駅前通り商店会、守木町商店会の4つであり、設立はともに1960年である。香丸商友会と中町商店会、守木町商店会は、水戸街道に連担する店舗を主体として組織されている。駅前通り商店会は、水戸街道と石岡駅

を結ぶ駅前通り沿線の店舗を主体として組織されている。これら4つの商店会は、加入店舗数からみても、商店会中第1位から第4位を占めており、駅前通り、中町、香丸、守木町の順に、それぞれ86、64、57、48店舗である。第4図にも示されるように、中町商店会は小売店舗の連担度が高いといえるが、香丸、中町、駅前通りを全体的にみると、金融機関をはじめとする業務施設やサービス業などが商店街のなかに混在して立地し、機能分化が進展していないことがわかる。

水戸街道から石岡駅を結ぶ街路としては、駅前通りのほかに金丸通りがある。金丸通りは、水戸街道から駅前通りと並行し、金丸町を東西に横断して石岡駅に達する狭小な街路である。この街路を中心として、金丸町には金丸寿商店会、金丸町金六会、金丸通り商栄会の3つの商店会がある。石岡駅に最も近接する金丸通り商栄会の加入店舗数は30であり、同商店会内の街路は、かつては市内の歩行者通行量の最大を占めた<sup>19)</sup>。石岡駅前



第6図 石岡市における商店会と大規模小売店舗の分布(1993年)  
(石岡商工会議所資料より作成)

に近接する地域には、飲食店などが入居する共同店舗が卓越し、また山本酒造跡地に1983年に開業した石岡プラザホテルは、市内では唯一の都市型ホテルとなっている。

## 2) 大規模小売店舗

商店会組織の分布が石岡中心市街地に集中しているのに対して、大規模小売店舗（第1種・第2種）の分布には、中心市街地と郊外との二極分化がみられる（第6図）。ここでいう郊外とは、主に国道6号および355号沿線の新市街地である。大規模小売店舗は14店であり、石岡中心市街地と新市街地に各7店ずつである。また、店舗面積は、合計24,345m<sup>2</sup>であり、中心市街地に11,626m<sup>2</sup>、新市街地に12,719m<sup>2</sup>とほぼ同規模である。

これら大規模小売店舗のうち、店舗面積が1,500m<sup>2</sup>を上回るような総合スーパーの立地動向が、石岡市の商業構造に変化をもたらしてきた。1970年代初頭にかけては、香丸町および中町を縦貫する水戸街道沿線の商店街が石岡市商業の核心地であった。1970年、中町にコーキショッピングプラザが店舗面積3,962m<sup>2</sup>で開業し、さらに1973年、石岡駅前には西友石岡店が店舗面積4,495m<sup>2</sup>で開業した。当時、双方の店舗を結びつける金丸通りにおいて、市内の歩行者通行量の最大を示したといわれるが、1988年には駅前の西友が閉店し、金丸通りの商業力が低下した。これに対して、1987年、中町に近接した大和田酒造の跡地にフジコシ（店舗面積2,300m<sup>2</sup>）が開業し、水戸街道沿線の商業力が増強されると同時に、国道6号沿線にジャスコを核店舗とするパレットが店舗面積6,300m<sup>2</sup>で開業した。すなわち、総合スーパーの立地からみた石岡市の商業構造は、香丸・中町の単核構造から、駅前と香丸・中町という回遊型の複核構造へと変化し、現在は、香丸・中町と新市街地という二極分化型の多核構造へと推移したといえる。

石岡市の大規模小売店舗の業種の特徴として、桐材加工業から発展した家具店があげられる。大規模小売店舗14店中6店が家具店となっている。駅前通りに位置する今泉家具センターは、明治末

期に桐下駄を主体とする桐製品の製造卸を開業した。同店は、東北地方までを桐材の集荷圏に含み、製品を関東、関西、九州地方へ出荷した。当時、石岡駅前には材木置き場があり、貨物の引き込み線もあったという。第2次世界大戦後になって桐タンスの製造小売を開始し、1960年代半ば以降、現在のような家具・インテリアの小売專業となった。1971年に水戸市、1976年に勝田市、1981年に日立市の順で支店網を拡充した。これと同様に、香丸に店舗を有する家具の山新も、茨城県内を中心として、家具店およびDIY店として出店し、多店舗展開を図っている。本社は水戸市へ移ったが、本拠地は石岡市であった。

以上のように、商店会は石岡中心市街地で組織されているにもかかわらず、大規模小売店舗の立地動向は、石岡市の商業構造を、中心市街地と市街地周縁部との多核構造へと変化させてきた。

## Ⅳ-3 中心商店街香丸・中町における商業活動

香丸町および中町の商店街を、石岡市の伝統的中心商店街と位置づけ、個々の小売店に対して、留め置きまたは聞き取りによるアンケート調査を1993年5月に行った。取り扱う店舗は、回収・回答率の都合上、香丸町および中町に分布する小売店のうち、水戸街道に面する小売店とし、以下、この小売店舗群を香丸・中町商店街と呼ぶ。香丸・中町商店街は、商店会組織としては、香丸商友会、中町商店会の範囲とほぼ一致する。

### 1) 業種構成

香丸・中町商店街の小売店は合計69店である。現地調査に基づき、69の店舗を商業統計中分類に従って業種分類すると、各種商品1店、織物・衣服・身の回り品19店、飲食料品15店、家具・建具・じゅう器15店、その他19店となった。店舗数全体からみると、買回品店、最寄品店双方の混在がみられ、中小規模都市の中心商店街の特徴を示しているといえる。以下、香丸・中町商店街における店舗の業種構成から、いくつかの特徴を示す。

まず、香丸・中町商店街の歩行者通行量に最も

影響すると考えられるのが、核店舗の立地である。ここでは、各種商品小売業に分類されるコーキョッピングプラザがそれに相当すると考えられる。同店は、店舗面積3,453m<sup>2</sup>で、中町南部に位置している。近世以来の呉服店であったが、1970年に現在の店舗で開業し、茨城県を中心に埼玉・栃木県を含め18店舗を展開するチェーン店の本店である。呉服・衣料品を主体としているが、テナントとして食料品スーパーが入り、購買者の日常の需要に応じている。同店が歩行者通行量と同様に、商店街に与える影響として、駐車場があげられる。同店はこれまで、水戸街道沿線の店舗跡の土地を借り上げるなどして、約250台の駐車スペースを確保してきた。

前述の通り、石岡市の商業の特徴の1つとして、伝統的な桐材加工業を基盤とした家具小売業の発展がある。このことは、香丸・中町商店街の業種構成にも反映している。同商店街に位置する小売店72店中、家具小売店は4店である。大規模小売店舗として、家具の山新石岡店がある。また、小買家具店は、石岡市郊外に大規模小売店舗を支店として経営している。また、本店が大規模小売店舗である七谷家具店の支店がある。

最寄品店の立地には、香丸と中町で差異がみられる。たとえば、飲食料品小売業をみると、香丸に5店、中町に10店となっている。香丸の飲食料品店が酒類および菓子であるのに対して、中町では、パン、菓子、鮮魚、乾物など、消費者の日常の需要に対応した業種が多い。このことは、中町がコーキョおよびフジコシなどの総合スーパー店舗間の回遊路に組み込まれており、一定の歩行者通行量が維持されているためと考えられる。

## 2) 開業年次

香丸・中町商店街には、老舗が多い。有効回答53店のうち、江戸・明治期に開業した店舗が22店、大正期から第2次世界大戦までに開業したのは15店であり、両者を合わせると37店となる。すなわち、香丸・中町商店街の小売店の半数以上が、第2次世界大戦前に開業した。一方、第2次世界大戦後の開業は16店であり、そのうち、1970年代以

降の開業はその半数に満たない。

このように、香丸・中町商店街の小売店は、第2次世界大戦以前から続く店舗が多く、近年における新規の立地はわずかであることがわかる。また、小売店が廃業し、店舗建物が取り壊された後の敷地は、駐車場として利用されている例が多い。

## 3) 経営形態と後継者

香丸・中町商店街では69店中、個人経営と法人経営がそれぞれ31店、38店と法人経営の方が上回っている。しかし、この法人経営の多くは有限会社であり、労働力は個人経営と同様に家族労働力が主体となっている。労働力について回答した小売店52店のうち、経営者を含む家族労働力のみで経営されている小売店は23店である。経営者の年齢は、有効回答54店中、60歳代以上と回答した小売店は30店であった。しかしながら、後継者がいると回答した小売店は46店中33店であり、後継者難とはいえない。聞き取りによっても、香丸・中町商店街では後継者問題は少ないことが確認された。

## 4) 土地所有と職住関係

香丸・中町商店街の小売店においては、土地の自己所有率はきわめて高い。回答があった店舗51店のうち、45店が一部所有を含め、店舗敷地を自己所有していると回答した。職住関係について回答した55店のうち、職住一致と回答したのは、42店であった。職住一致の要因の1つとして、水戸街道沿いは短冊状の東西に細長い敷地に区画され、店舗部分の奥に十分な居住スペースが確保できることがあげられる。一方、職住分離と回答した13店のうち、当初から分離という4店を除くと、1985年以降に職住分離したのは6店に過ぎず、これら6店の居住地移転先はすべて石岡市内である。

## 5) 香丸・中町における商業活動

香丸・中町商店街は、石岡市の伝統的なメインストリートである水戸街道に沿って形成された。現在でも江戸期および明治期など第2次世界大戦以前に開業した店舗を主体としている。小売店の多くは職住一致の小規模な家族経営であり、経営

者の高齢化が進展している一方で、後継者については確保されている。

一般に、わが国の中小都市における伝統的中心商店街においては、モータリゼーションの進展などに起因する消費者行動の変化によって、買物客が減少するという問題を有している。石岡市においても、国道6号沿線および石岡市と小川町、玉造町方面とを結ぶ国道355号沿線に、大規模小売店舗をはじめロードサイドショップと呼ばれる街路沿線型の店舗が立地した。また、石岡市郊外においては、大規模な住宅団地が形成され、人口の増加が進展している。

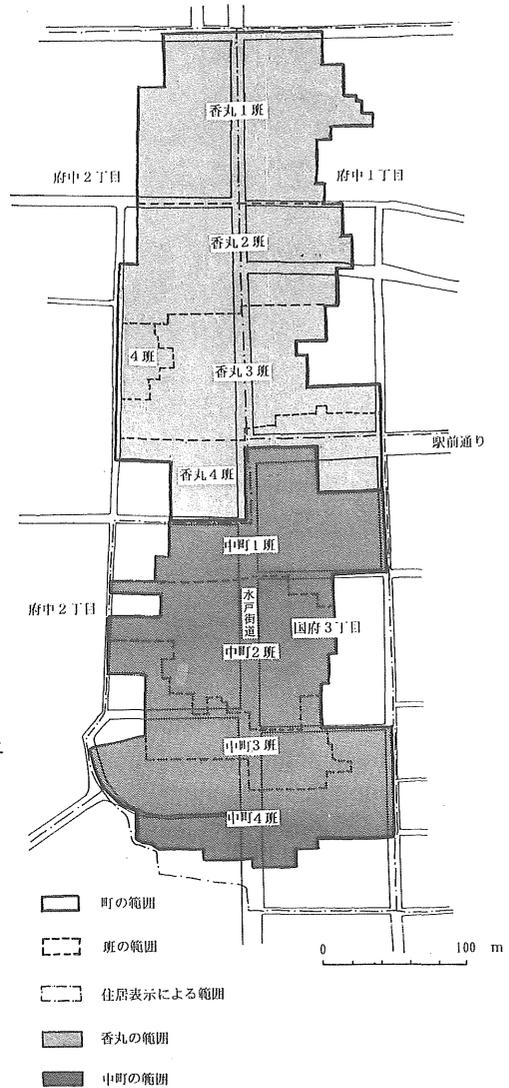
しかしながら、石岡市内の公共交通であるバス交通網は、利便性は低いものの、石岡駅前および香丸・中町商店街を主な結節点としている。すなわち、石岡市郊外および周辺市町村からのバス通学による生徒、高齢者を主体とする自家用車を利用しない消費者には、香丸・中町を中核とする中心商店街への近接性は高いと考えられる。石岡中心商店街の商業活動は、これまでの研究で指摘されたように、小規模な家族経営によって職住一致で行われている。また、店舗の新規立地は少なく、何世代にもわたって中心商店街に居住し、商業に従事している。このことは、都市中心部における人口の維持機能としても作用し、後述するような生活組織の維持に深く結びつくものと考えられる。

## V 中心商店街香丸・中町における生活組織

### V-1 町内会組織

香丸・中町は近世以来の町区分を継承したものであって、現在の石岡中心商店街を形成している。ここでは自治組織として町内会組織を分析する。

香丸は上町・下町に分かれていたが<sup>20)</sup>、現在では4部に分かれている(第7図)。そのうち上町が1部、中の町が2部、下町が3・4部となっている。さらに「部」には「班」と呼ばれる下部組織があり、班は回覧板を回したり、葬式組として機能している。町内会の役員は「駐在員」と呼ばれ、各部から1人ずつ計4人が選出される。駐



第7図 石岡市香丸・中町地区の町内会組織の範囲(1993年)

(聞き取り調査により作成)

在員の主な役割は市からの伝達事項の連絡役であり、駐在員のうち1人が香丸を代表する駐在主任(町内会長)となる。また役員は、毎年2月上旬の初午に行われる総会で選出される。総会では、駐在員のほか、祭礼の運営を行う氏子会役員を選出する。総会は町の氏神で町内にあった稲荷社で開催していたが、稲荷社が総社宮に合祀された後は吉野楼、現在では総社宮の社務所で行っている。

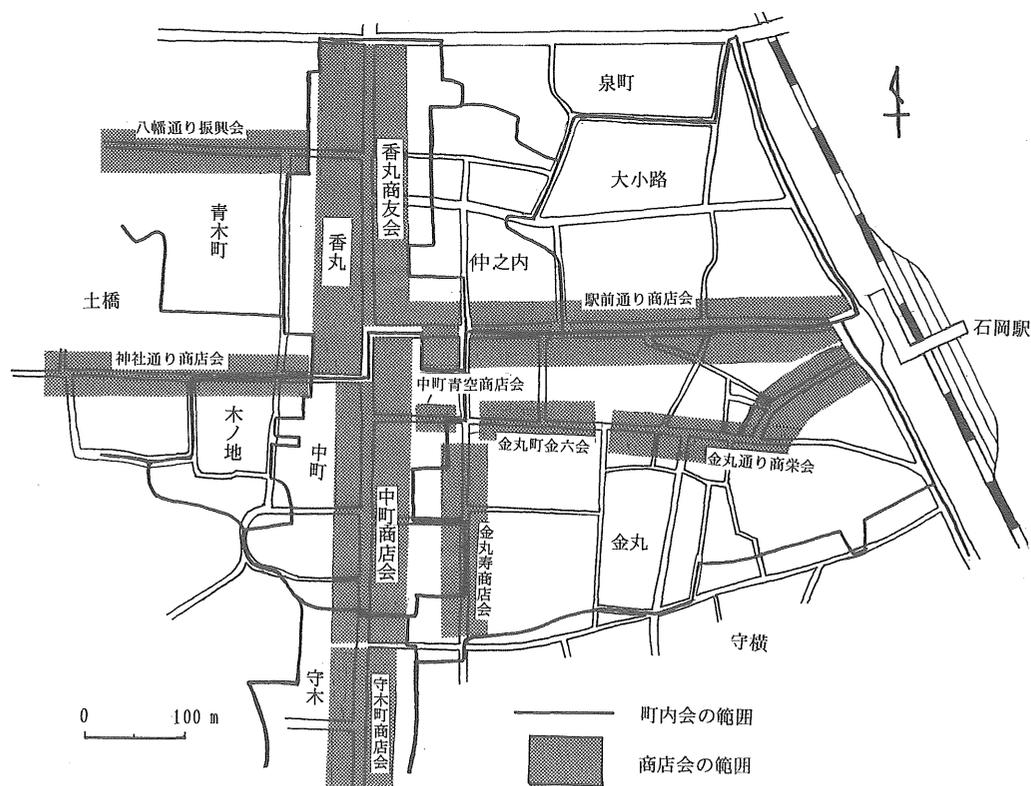
中町でも、香丸と同様に町内会は4つの部に分かれている。部の下部組織である班は、各部に3～4班程度設けられている。役員は駐在員と町務委員からなり、各部から2名ずつ計8名が選出される。このうち町務委員は、祭礼（稲荷、愛宕、総社宮）の運営に携わる。

このように、石岡市中心部に位置する香丸・中町では、「町一部一班」を単位とした3層からなる町内会組織が存在する。現在ではその機能は主として行政の伝達であるが、旧来の宗教的な機能も継承している。香丸では町内会の機能は行政の末端機能のみであるにも拘わらず、役員の選出は町の氏神である稲荷社で実施されていた。中町では町内会の機能自体に祭礼の運営といった宗教的機能も包摂している。これらの町内会組織は、

1977年4月1日に実施された住居表示変更後も継続している。これは現在の住居表示が形式的なものにすぎず、自治的機能を伴っていないことを示している（第7図）。

## V-2 商店会組織

香丸・中町は、それぞれ「香丸商友会」・「中町商店会」を組織している。両者とも1960年4月に結成された。商店会は、商店街の活性化のために、街灯管理、共同売出、街路の飾り付けなどを実施している。これらの組織は基本的には町内会組織に対応している（第8図）。香丸商友会の会員は「原則として旧香丸町に店舗を有する」者であり、中町商店会でも南の一部に守木町を含んでいるが、基本的には中町の商店主である。これは、



第8図 石岡市中心部の商店会と町内会の範囲（1993年）  
（石岡市役所資料および『石岡地域商業近代化地域計画報告書』より作成）

商店会の役員が基本的に町内会組織の部から数人ずつ選出され、香丸・中町がメインストリートである水戸街道沿いの街路を基本とした立地であるためと考えられる。

一方、水戸街道と垂直な街路に位置する大小路や金丸などでは、町内会組織と商店会組織が別個に組織されている。たとえば、大小路・仲之内では「駅前通り商店会」、金丸では「金丸通り」と「金丸寿」の各商店会が通りに沿う形で結成されている（第8図）。これは大小路・仲之内・金丸などの商店が、石岡駅開設以来の新しい街路に沿って形成された商店街であったためである。したがって、商店会は町内会組織とは重複せず、通りに面して形成される「通り主導型」の商店会といえる。これに対して、商店会組織と町内会組織が一体となって組織されている香丸・中町の商店会は、「町内会主導型」の商店会といえよう。

しかしながら、香丸・中町では、水戸街道に垂直な街路（横町）に位置する商店は、同じ町内会に所属していても別の商店会を結成した。たとえば中町では「中町青空商店会」がこれにあたる（第8図）。しかしこの商店会は、街道沿いの商店会と比較すれば設立は新しく、石岡市商工会に未加盟で規模も小さい。このような商店会は、横町での商店の形成に伴って結成されたといえる。

このほかに、中町には「中町商店街協同組合」、「石岡ショッピングセンター協同組合」がある。このうち前者は、1967年に駐車場の建設・運営のために設立された組織で、「中町商店会」の会員61名のうち28名が参加している。後者は中心商店街の地盤沈下に対応するため、地元主導で大手スーパーを中心部に誘致するのを目的として、1980年頃に結成された。結果的に郊外への進出となったが、中町からは大手スーパーに6店がテナントとして加わった。これらの組織は、商店経営者がモータリゼーションといった時代に対応して結成した組織である。

このように、香丸・中町における商店会組織は、近世以来の町で街道筋にあたるため、基本的には町内会組織とはほぼ重複している。また、商店会

は時代に対応して随時結成されるため、町内に複数存在しているものの、町内では街道沿いの商店会が中心的な存在となっている。

### V-3 社会組織

香丸・中町に関する社会組織として、ここでは子供会、青年会、婦人会、老人会などのように、年齢別・性別に組織される社会教育・福祉といった行政主導型の組織を対象とする。

#### 1) 子供会

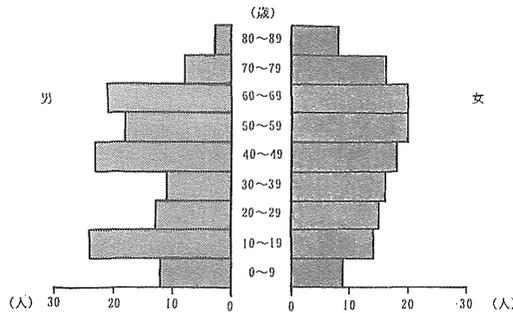
石岡市の子供会は、市全体の組織である「石岡市子供会育成連合会」の下に、小学校区ごとに9つの子供会がある。このうち香丸・中町は、石岡小学校子供会に入り、その下部組織として香丸子供会、中町子供会を組織している。その範囲は町内会と一致し、子供会の父兄の集まりである育成会も組織されている。子供会活動として石岡祭への参加やクリスマス会・バス旅行などを実施しているが、概して活発とはいえないという。これは、香丸・中町では職住分離による児童数の減少が他の町より著しいためと考えられる（第9図）。

#### 2) 婦人会

石岡市の婦人は、市全体の組織である「石岡市地域婦人団体連絡協議会」の下、5地区（石岡・高浜・三村・東・府中）に分かれて組織されている。婦人は主としてゴミや家庭排水など生活環境に関する問題の研修を行い、町内単位ではなく、基本的には個人の任意参加である。香丸・中町の婦人は中心市街地を範囲とする「石岡婦人会」に属する。「石岡婦人会」は戦時中の国防婦人会を基にして、1948年に設立された。会員数は最盛期の1970年頃は約400名であったが、現在では150名に減少している。年齢構成は60～70歳代と石岡市内の各婦人会の中では、特に高齢者の割合が高い。香丸・中町の会員は総会員数150名中それぞれ4～7名程度にすぎない。

また、婦人の属する組織として「商工会議所婦人部」があるが、これは商店経営者を対象としたもので、「石岡婦人会」とは別組織である。このように、中心部での婦人会の組織は、町内会組織

### 1) 香丸地区

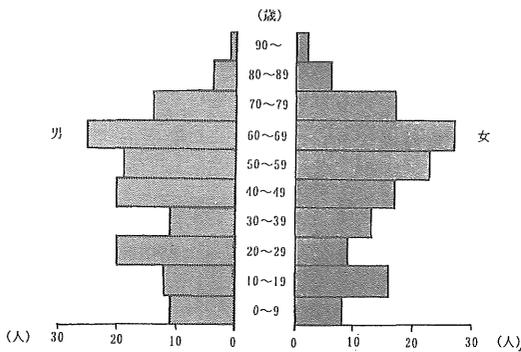


第2表 石岡市香丸・中町地区における世代別世帯数 (1993年3月)

世代	香丸	中町	合計	構成比
一世代世帯	24	28	52	32.1%
二世代世帯	41	37	78	48.2%
三世代世帯	14	17	31	19.1%
四世代世帯	1	0	1	0.6%
合計	82	80	162	100.0%
一世帯あたりの人員	3.4	3.4	3.4	-

(住民基本台帳により作成)

### 2) 中町地区



第9図 石岡市香丸・中町地区の性別・年齢別人口ピラミッド (1993年3月)  
(住民基本台帳より作成)

とは無関係で<sup>21)</sup>、活動も農村部と比較すると低調である。

### 3) 老人会

「石岡市老人クラブ連合会」の下、町内ごとに老人会が組織されている。1993年度では58の団体、2,800人程度が加入している。このうち中心市街地では、土橋、幸町2丁目、国分町、大小路、青木町、守横町、仲之内といった市街地周辺部や横町に老人会がある。一方、中心商店街に位置する香丸・中町では、第9図の人口ピラミッドや第2表で示したように、一世代世帯が比較的多く、高齢者や高齢者世帯の割合が高いにもかかわらず、老人会は組織されていない。商店では高齢であっても経営活動に従事する例が多く、また商店会組

織が代替しており、老人会組織の必要性は低いものと考えられる。

このように、香丸・中町における社会組織は、加入者がきわめて少なく、活動も全体的に低調である。これは子供会や青年会のように、職住分離によって若年者の人口が著しく減少していること<sup>22)</sup>、また婦人会・老人会のように中心商店街ゆえに活動が商業組織や機能に包摂されることなどが理由として考えられる。

## V-4 宗教組織

### 1) 檀家組織

香丸・中町の住民の大部分は、中心市街地に点在する寺院の檀家となっている(第10図)。このうち檀那寺は、真言宗国分寺(国分町)、曹洞宗清涼寺(守木)、浄土宗照光寺(土橋)、天台宗東耀寺(若松)、浄土真宗本浄寺(青木)などである。このように宗派が多く存在しているのは、IIで述べたように、寺院の多くが近世初期の城下町建設に伴って当地に集められたためと考えられる。また、寺院別の檀家分布には、町内ごとの偏在は認められない。むしろ、それぞれの家の系譜の違いを反映しているものと考えられる。たとえば、国分寺には常陸大掾氏との関係が伝えられる矢口家、高喜(コーキ)や、近世初期に移住した小松屋、近江商人と伝える近清書店(淡海屋)、浜総業、浜近商店、青柳、丁字屋など近世前期に銚子から当地へ移住した家が檀家となっている。



第10図 石岡市香丸・中町地区における檀家の分布 (1993年)

(聞き取り調査により作成)

## 2) 葬祭組織 (葬式組)

石岡市中心市街地の葬式は、近隣の農村部と同様に<sup>23)</sup>、1980年に石岡市仏教会が組織される以前においては、「遠使」と「六道」を中心に執行された。遠使は葬儀の触れ回りや檀那寺との交渉などを行い、六道は出棺や埋葬を司る役目であった。町内には「六道箱」と呼ばれる近世以来の帳箱が保管されている。六道箱には戒名や葬儀の式次第などを記した帳面と葬送用具が入っており、葬儀の際に手伝衆によって葬儀の家へ引き継ぎが

行われる。

香丸の葬祭組織は「三夜講」と呼ばれる。三夜講は二十三夜講を指し、現在は行われていないが、かつて葬祭組織と三夜講が一体となっていたため、葬祭組織がこの名で呼ばれたものと思われる。葬式組は上町 (1部, 2部) と下町 (3, 4部) に二分され、以前は組の中から葬儀執行の中心となる遠使と六道を選出した。2つの葬式組は、香丸上町と下町という近世以来の単位であり、この単位は農村集落の坪に相当する。現在では、町内会の下部組織である班を単位とするようになったが、葬儀の費用は8割を当家が負担し、2割を葬式組の積立金から援助しており、旧来の葬式組が継続している。

中町でも、現在は班 (隣組) を単位に実施され、町内会組織のもとで葬儀が行われている。班の中から2名が「遠使」として選出され、近年では町中から寺院までの出棺葬列が廃止になったり<sup>24)</sup>、葬儀の一部を業者が取り仕切るなどの変容がみられる。

このように、石岡市中心部の葬式組は町内会組織へと受け継がれつつあるが、他の都市の多くがすでに消滅しているにも拘らず<sup>25)</sup>、現在でも葬式組が少なからず維持されている。また、葬式組が近世以来の香丸上町、香丸下町、中町といった町を単位として組織されていたことが明らかとなった。

## 3) 氏子会組織

常陸国総社宮の例祭は、現在「石岡祭」と呼ばれ、関東三大祭に数えられる。祭りの起源については、近世の天王社の祇園祭りを継承したものと考えられている<sup>26)</sup>が、詳細は不明である。現在の石岡祭は、1982年から石岡祭実行委員会が運営し、その委員長は市長、副委員長は観光協会会長と氏子会会長であり、中心市街地のみならず、茨城台などの新興住宅地も参加している<sup>27)</sup>。

祭礼は中心市街地の16町内が毎年交代で年番となって執行し、このような年番制度が確立したのは、総社宮が県社に昇格した後の1902年 (明治35) のことであった。祭りは9月14日神幸祭、15日例

大祭、16日還幸祭と3日間行われ、御神体が旧町内の獅子・山車を引き連れて年番の町内に設けられた御仮屋に行き、その神霊によって氏子地域を浄める形式をとる<sup>28)</sup>(写真11)。総社宮は神事のみを携わり、その他は主として年番町によって運営される。氏子は旧市内居住者に限られ、現在約2,500戸程度あり、各町ごとに氏子会組織が形成されている。



写真11 1934年(昭和9)の石岡祭

香丸・中町では、祭礼にはそれぞれ聖徳太子・日本武尊の山車を出して参加している。香丸では、氏子会の役員は各部から3人ずつ計12人、初午の際の町内会総会で選出される。氏子会は祭礼の運営、費用の徴収にあたる。一方中町では、他の町と同様に「中町氏子会」と呼ばれる組織はあるが、役員選出を実施せず、年会費の徴収(札配り)も総社宮で行うなど、氏子会は実態がない。ただし、祭りの運営は町内会組織である町務委員・駐在員の計8人の体制で、会所の設営や山車の練り歩きなどを行う。またその運営費は町内の全員が負担し、町内会の特別会計として集金される。

このように、香丸・中町ともに総社宮の氏子会組織が存在するが、現在では相違がみられる。香丸では氏子会と祭礼の運営が一体であるのに対し、中町では両者が分離している。小売業の卓越する中町では、住民の異動が多いことがその理由

として考えられる。しかし、各町内ごとに参加する石岡祭は、町内の帰属意識を高め、町民の一体性を強めている。

#### 4) 民間信仰組織

民間信仰組織としては、まず稲荷講があげられる。稲荷信仰は都市では商工業者の守護神として祀られ、商業活動が発達した石岡でも近世以降、稲荷信仰が盛んであり、町ごとに稲荷社が祀られ講が組織された<sup>29)</sup>。

香丸の稲荷社は橋本旅館の敷地内にあったが、現在は総社宮へ合祀されている。2月上旬には初午の祭りが総社で行われ、同時に町内会総会も開催される。中町にも町年寄であった矢口家隣地の天王社(明治以降、八坂神社)敷地に稲荷社があったが、1952年に守木町の金刀比羅神社へ合祀され、2月上旬に初午の祭りがあがる。町の並びで5軒ずつ上当(ウワドウ)・下当(シモドウ)が選ばれ、初午の祭礼の後、上当が下当及び町内会の町務委員を招待して会食を行う。上当は祭りの運営費の負担や札配りなどを担当し、下当は会食の際に上当との引き継ぎをし、次年の当番となる。中町では1844年(天保15)から現在に至る「稲荷講初午文書」が残されている。

稲荷講のほか、香丸上町には星の宮の講がある。国府所在地である石岡には日天宮、月天宮、星の宮があり、星の宮は北斗七星を祀る妙見信仰で3月15日(陰暦)に祭礼を行う。1852年(嘉永5)以降の講の記録が残っており<sup>30)</sup>、近世期の早い段階で香丸の商人によって祭事が行われたものと推測される。現在の講員は香丸上町の5軒のみであり、稲荷講と同じ講中である。星の宮の社は国分寺北方にあったが、後に稲荷社、総社に合祀された<sup>31)</sup>。また、香丸では二十三夜講が組織されていたが、今では若松町において二十三夜尊とその講が残っている。一方、中町では愛宕社の祭りがあがる。初午の後の2月中旬に町務委員4人が町内と貝地にある愛宕社の清掃と札配りを実施する。

このように、香丸・中町は都市の中心商店街に位置するにも拘らず、複数の生活組織が重層的に

第3表 石岡市香丸地区と中町地区との生活組織の比較（1993年）

	町内会組織	商店会組織	社会組織				宗教組織			
			子供会	婦人会 <sup>1)</sup>	青年会	老人会	核家組織	葬祭組織	氏子組織	民間信仰組織
香丸	単位：町一部(4部)一班 役員：駐在員(4名) 役員選出：2月上旬(初午) 役割：市との連絡	名称：香丸商友会 単位：香丸町 設立：1960年(昭和35)	香丸子供会	無	香丸会 石岡祭りの捕佐	無	各世帯ごとに異なる	名称：三夜講 単位：上町(1・2部) 下町(3・4部) (役員8名) 活動は班単位	香丸氏子会 (役員8名)	福商社：社一総社へ合祀 祭礼一初午、町内会役員 の選出 星の宮：社一総社へ合祀 講一上町の5軒のみ 三夜講：消滅
中町	単位：町一部(4部)一班 役員：駐在員(4名) 町務委員(4名) 役員選出：3月末 役割：市との連絡(駐在員) 祭の運営(町務委員)	名称：中町商店会 単位：中町(一部守本を含む) 設立：1960年(昭和35) 他：中町青空商店会 中町商店街協同組合 石岡ショッピングセンター 協同組合	中町子供会	無	無	無	各世帯ごとに異なる	単位：中町全体 活動は班単位	中町氏子会 <sup>2)</sup>	福商社：社一金刀比羅社へ合祀 祭礼一初午、当番制 (上・下当) 愛宕社：祭礼、2月中旬 八坂社：社一総社へ合祀 祭礼一消滅

1) 婦人会は地区単位では組織されていない。

2) 役員は選出しない。町務委員が祭を運営し、総社が配祀する。

(聞き取り調査により作成)

存在している(第3表)。これらの組織は、中核機能である商業機能に立脚しながらも、町内会、商店会、宗教といった機能が相互補完的に存続し、町として一体となって組織されている。これは最近まで大規模な都市再開発事業などの改造が行われず、職住分離も比較的進んでいない地域社会の流動性の低位さが一因として考えられる。

## VI おわりに

石岡市の都市空間の特性を考察するために、中心商店街の産業構造と景観の変化を踏まえ、その商業活動とそれに携わる人々の様々な生活組織の実態を明らかにした。

石岡中心商店街の原型は、17世紀の城下町とその後の陣屋町の建設に求められ、近世期以来の醸造業、近代の桐材加工業や製糸業などに代表される産業構造が変質していく中で、次第にその経済的地位は低下していった。現在では水戸市と土浦市の商圈に挟まれ、県内第7位の商圈人口であり、石岡市の商業構造は陣屋町の系譜をひく中心商店街と、国道沿いの郊外とに二極分化しつつある。すなわち、石岡都市圏における石岡中心商店街の中心性は低下しつつあるといえる。中心商店街においては店舗の新規立地が少なく、業種の変化は見い出せるものの、近世・近代創業の商店が多い。

これらの商店は土地を自己所有し、小規模な家族経営が主体であり、職住一致が多い。また、店蔵や洋風建築の店舗も、高度経済成長期に面覆いやアーケード化が進み、特徴のない町並みとなった。このような点は、他の地域中心都市にも共通してみられる傾向である。しかし、近年では香丸町の近代化事業による景観整備が実施されるなど、中心商店街の活性化が模索されている。

石岡中心商店街における様々な生活組織の基本単位は、近世以来の町区分を継承した町内会を基盤としている。近世以来の香丸・中町の商店会は、石岡駅開設以降に組織された商店会が街路中心であるのに対して、町内会を基本的に踏襲している。老人会、婦人会などの行政主導型組織の活動は、農村部と比較して活発とはいえず、むしろ高齢者の活動は商店会組織の中で行われている。町内会を単位とした氏子会組織、葬祭組織、民間信仰組織は、中心商店街の人口が減少し高齢化が進行する過程で変質しつつも、農村部と同様に維持されている。とくに、氏子会組織は町内会組織に内包されており、商業振興と連携している石岡祭りの母胎となっている。

以上の点から、石岡中心商店街の住民は、中心商店街の店舗を維持しつつ、郊外への進出を行っている例も多く、中心商店街の店舗は商業機能よ

りも居住機能へと重点が徐々に移行しつつある。  
この背景には、経済的要因の有無にかかわらず、  
都市中心部という立地環境の利便性と、伝統的な

生活組織の上に成り立つ親密な人間関係が存在す  
るためと考えられる。

本稿を作成するにあたり、石岡市役所、石岡市立図書館、石岡商工会議所には貴重な資料と写真を提供していただきました。中心商店街の商店会長ならびに各町内会の皆様からは貴重なお話をうかがい、またアンケート調査にご協力いただきました。とくに、天賀谷亘、石崎雅比古、今泉恒夫、大久保寿、亀下甚四郎、駒田良男、曾根田隆光、高木興一、高野弘治、高野輝也、中島一雄、濱 雄太郎、幕内君枝、森田 久、矢口隆文、矢口芳正、山内和治、山本 進の各氏にご協力を賜りました。また、現地調査にあたり本学教育研究科の川嶋ユカリさんに、資料整理および製図の一部は本学比較文化学類の見村和嗣君に、それぞれお願いしました。以上記して厚く御礼申し上げます。

#### [注および参考文献]

- 1) 高橋伸夫編 (1990) : 『日本の生活空間』古今書院, 259ページ。
- 2) 高橋伸夫・山本一彦 (1990) : 日立市域における生活空間の構造 (3), 地域研究, 31-1, 38~55.  
平 篤志 (1989) : 東京都千代田区神田地区における人口減少に伴うコミュニティーの変容. 地理学評論, 63, 701~721.  
村山祐司・根田克彦・山下宗利・郭 金水 (1984) : 鉾田町における中心商店街の店舗構成とその形成過程. 地域調査報告, 6, 67~83.  
高橋伸夫・山下宗利・平 篤志・橋本雄一・松村公明 (1990) : 水海道市における商業の地域構造. 地域調査報告, 12, 187~214.  
高橋伸夫・村山祐司・松村公明・吉村忠晴・側島康子 (1992) : つくば市における商業地域構造の変化. 地域調査報告, 14, 43~64.
- 3) 高橋重雄 (1992) : アメリカ合衆国における都市地理学研究の動向. 地学雑誌, 101, 269~282.
- 4) 義江彰夫 (1985) : 中世前期の国府—常陸国府を中心に—. 国立歴史民俗博物館研究報告, 8, 23~101.
- 5) 佐々木銀弥 (1970) : 中世常陸の国府六斎市とその商業. 茨城県史研究, 18, 1~12.
- 6) 市村高男 (1991) : 戦国~近世初期の府中について—常陸府中の城下町化を中心として—. 国史学, 143, 49~60.
- 7) 石岡市史編さん委員会 (1985) : 『石岡市史 下巻』石岡市, 705.
- 8) 鈴木杉夫家所蔵. 年代は名主名より推定した。
- 9) 石岡市史編さん委員会 (1979) : 『石岡市史 上巻』石岡市, 440~466.
- 10) 石岡市立図書館保管. なお, 1892年測量の地籍図が大久保寿家に所蔵されている。
- 11) 昭和7年4月6日の読売新聞の記事によれば, 4年の大火以後に守横町は約4倍の面積となったが, 新旧住民の対立によって守横町から高房町が独立した. 守横町は明治前期平沢紋兵衛が鎌を製造する鍛冶屋を開業し, これを契機に鍛冶屋が集まり, 鍛冶屋町とも呼ばれた。
- 12) 前掲7), 758.
- 13) 佐賀純一 (1993) : 『田舎町の肖像』図書出版, 144.
- 14) 前掲7), 1036~1044.
- 15) 前掲9), 953.
- 16) 常陽産業開発センター (1992) : 『茨城の商圏 第10回茨城県広域消費動向調査結果報告書』241ページ. なお, ここでいう商圏とは, 商品総合において, 商圏中心都市の吸収率が10%以上の市町村を, 当該商圏中心都市の商圏としている. 石岡市は地元での吸収率が77.1%であり, 土浦市の石岡市に対する吸収率が10.0%であるため, 双方の商圏に含まれることになる. しかしながら, 吸収率の高い方

- の商圏に含めるものとする、2つの商圏に含まれる5市町村、すなわち石岡市、千代田町、玉里村、美野里町、岩間町のうち、千代田町のみが土浦商圏となり、それ以外の4市町村は石岡商圏となる。
- 17) 前掲16), 15.
  - 18) 前掲16) 品目別の商圏では、商圏中心都市の吸収率が1%以上の市町村を、当該商圏中心都市の商圏としている。
  - 19) 石岡商工会議所ならびに石岡商店会連合会による、1979年以降の交通量調査集計表によれば、金丸町ル・ロア前において、休日では1979年、1982年、1983年、1984年、1986年、1987年の6回の調査にわたり、市内における歩行者通行量の最大を示している。
  - 20) 「府中町絵図」では、香丸は「香丸上丁、香丸下丁」と記載されている(第2図)。
  - 21) 中町の南の守木では1960年に「みどり婦人会」が、子供会とともに結成され、富士登山などの活動を行っていたが、現在は消滅している。
  - 22) 香丸には「香友会」と呼ばれる青年会があるが、これは氏子会の一組織であり、石岡祭の時のみ活動する。各町にこのような組織があり、祭りの主役的存在となる。しかし、中心部の香丸・中町では若者人口の減少により他地域の団体が補佐している。
  - 23) 石岡市史編さん委員会編(1983):『石岡市史 中巻Ⅱ』。石岡市, 991~996.
  - 24) 1980年に石岡仏教会との間で規定された。このほか僧侶への布施の取り決めなどもなされた。
  - 25) 千葉徳爾によれば、名古屋や豊橋では、村落部で見られるような葬祭組織が都市にも存在していた。しかし、名古屋では昭和初期、豊橋では昭和30年代には消滅した。その一因として地域社会の流動性の大きさをあげている。千葉徳爾(1993):都市内部の葬送習俗。塚本学・宮田登編『日本歴史民俗論集5—都市の生活文化—』。吉川弘文館, 237~249.
  - 26) 天王社は、かつて中町の町年寄矢口家の隣地にあったが、総社へ合祀されている。前掲7), 773~783.
  - 27) 石岡祭は15町内で運営されていたが、1982年以降には観光協会も関与するようになった。
  - 28) 前掲7), 1288~1290.
  - 29) 石岡市史編さん委員会編(1984):『石岡の歴史』石岡市, 144~145.
  - 30) 前掲29), 144~145.
  - 31) 今泉義文(1983):『石岡の今昔』崙書房, 100~102.